

日本IT書紀

155 肩書きは“営業部長”

08 宣試篇
卷之二十一 寛國

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第百五十五

肩書は、営業部長

一

一九六七年の八月、コンピュータアプリケーションズ(CAC)、日本コンピュータ・ダイナミクス(NCD)に続いて、国内三番目のソフト会社「ソフトウェア・リサーチ・アソシエイツ」(SRA)が設立された。

設立当初からソフトウェア開発方法論の研究に取り組み、八〇年にいち早くUNIXを導入して構造化プログラミングによるソフトウェアの分散開発、ネットワークを活用したコラボレーションなどを提唱し、だけでなく自ら実践し、さらにソフトウェアのオープンソース化で先駆けを成した。利益度外視の研究開発とソフト業界の基盤整備に多額の資金を投入したという点で、まことに欲のないユニークな企業といっている。

この会社の創業者は丸森隆吾という人物である。

五九年に早稲田大学商学部を卒業した。そのまま同大学大学院の商学研究科に残り、修士課程を修了して沖ビジネ

スマシン販売に入社したのは六二年の春である。

その年に沖電気はアメリカのスペリーランド社とUNIVACコンピュータの国内ノックダウン生産の契約を結んだ。それに伴って沖ビジネススマシン販売は六六年に本体に吸収されることになった。丸森は自動的に沖電気工業に移籍し、SRAを設立した時は営業係長の職にあった。

一九三五年、宮城県の北端、岩手県に接する米川村に生まれた。

「いかにも、うさぎ追いし……」という感じの町ですよ」と丸森は目を細める。

情報サービス業界では、
——生まれ故郷は「丸森」という町である。
ということになっている。

福島市を起点に県北の保原・梁川を経て宮城県南の角田、柴田を経て東北本線槻木に至る「丸森線」という鉄道がある。町といい、鉄道といい、その名を姓としているからには地元の名家富豪の出自であろう、という話がまことしやかに伝わっている。

だがこの話は周りが作り上げたもので、当人は宮城県出身という以外、一言も語っていない。事実、この人の口からプライベートな話を聞いたことはほとんどない。

「いちいち説明するのは面倒だから」

という。いかにもこの人らしい。
ところが本書を書くに当たって郷里に問合わせまでして
くれた。

「いやあ、勉強になった」

それを言うのは、むしろ筆者である。

いま一つで過誤を犯すところだった。

「気仙沼にいた村上何某の屋号が、丸森だった。そこから分家して、米川村に移ったのが八代前の喜作という人。その人が本家の屋号を姓にしたんだそうです」

このことは丸森自身も知らなかった。

知らせたのは実兄の丸森仲吾である。七十七銀行頭取。

ついでながら分かったのは、伊達政宗の家臣に信濃源氏の流れを汲む村上内膳政重という部将がいる。その娘・紗（もしくは妙子・本寿院？）一六六六が政宗の側室となり、もうけた一女・千菊姫が丹後宮津京極高国（一六一六―一六七六）の室となった。気仙沼の村上何某は、その系流であるに違いない。

代々、名字帯刀を許された名主であって、幕末から昭和にかけて村長を務め、養蚕で財を成し、林業と金貸業、造り酒屋など手広く営んだ。幼少期は第二次大戦の最中だった。

父親を早くに亡くし、母親の苦勞を見て育った。そのこ

とが失敗にくよくよしない精神と人を思いやる気持ちを育んだ。

二

コンピュータと出会ったのは、『ソフトウェアに賭ける人たち』によると、「一九五八年の秋ごろ」となっている。同書にそのいきさつの概略が記されているが、より詳細にいうと次のような事情だった。

新宿の青梅街道を中野坂上に向かう途中、成子坂に面して「成子坂映画館」があった。後世の記録によると「成子映画劇場」という表記もある。そこで、丸森の叔父が「電子計算機入門セミナー」を開いていた。叔父というのは都立商科短期大学教授だった竹中直文である。

「しばしば自宅に押しかけては夕食を食べさせてもらった。これは手伝わないとまずいな、とアルバイトをした。受講者の受付や資料を配る仕事で、一回当り三百円をもらった」

という。

「セミナーの会場は映画館の二階でした。入り口は一緒なので、アルバイトをしながら映画も観れる。こんないアルバイトはないと思って、喜んでやりました」

このとき東大理学部の学生だった岸田孝一も、同じアルバイトでセミナーを手伝っていた。英語力を買われ翻訳の仕事をしていた。講座で使うプログラミング入門書が中心だったが、竹中がのちに出版した『オフィスワーク・オートメーション』という書籍の下訳もやった。

二人はセミナーにも出て、プログラミングを学ぶことができた。

「どういうわけか気が合った。知り合った二日目に、新宿で一緒に飲んで意気投合した」

以後、二人は交友を深めていく。

岸田は一九三六年（昭和十一年）生まれなので、丸森より一つ年少である。しかし丸森が大学院に残り、岸田が東大を中退したため、社会人としては岸田が一年先輩ということになる。六一年にプログラミング技術を買われて沖ビジネスマシン販売に入社、基本ソフトやコンパイラなどの開発に従事した。

一方、丸森は修士課程を修了するに際して山一証券への入社が内定していた。しかし指導教授から

「就職先は決めたかね？」

と尋ねられたとき、あいまいな答え方をした。

「まだ決まっていないのなら、ここはどうだろう。うちのOBで副社長をやっている人から、優秀な学生をくれ、

と言われているんだ」

紹介されたのが沖電気工業だった。

「当時、沖電気と山一証券なら、誰だって山一を選んだでしょう。でも、小っちゃいほうが面白いかな、と思ってね」

偶然にも岸田と同じオフィスで仕事をするようになった。

一九六六年十月に通産省の大型プロジェクト「超高速電子計算機開発」に伴って、日本ソフトウエアが発足した。

丸森の上司で電子計算機事業部長であった藤井純が、その取締役技術部長として転進した。

加えて沖ビジネスマシン販売が本体に吸収されることが本決まりとなった。スペリーランド社のコンピュータをノックダウンで生産するという。

沖電気オリジナルの基本ソフトは不要になる。岸田らソフト部隊の処遇が課題となった。沖電気に戻ると、いかに優秀なプログラマーといえども、岸田は高卒の扱いになつてしまう。

——それはないではないか。

叔父の竹中に相談すると、

「東化工という会社が計算センターを設立する計画を進めている。そこはどうだろう」

という話になった。

筆者注「東化工」は「どうかこう」と読む。

経理担当常務が竹中の九州大学の同期だったのだ。

ところが基本ソフトやコンパイラなどを開発していた技術者にとって、給与計算や在庫管理の業務プログラムは面白くも何ともなかった。

——コンピュータは数学、物理の複雑な方程式を解くためにあって、事務計算は足し算、引き算の世界である。

——それなら経理のソロバンで十分。

という時代だった。

だけでなく、本体の東化工が東芝グループに入り、コンピュータがTOSBAC3400にリブレースされるという。設立された計算センターの先行きも怪しい。

「そんなこんだで気がついたら梁山泊の頭目に押し上げられちゃってね。虎ノ門界隈で飲んだり麻雀やっていた仲間間の窮地を見るに見かねて、といったほうがいいかな」
ちなみにこの仲間がどれほど麻雀をやっていたかという
と、

「毎月の給料日になると、精算書が回覧されるんですよ。ひと月に二十三回っていうこともあったな」

そう証言するのは三田守久である。竹中直文の助手をしていたとき丸森、岸田と出会い、沖電気—SRAの道をもに歩んだ。のち同社専務を経て、オーブンテクノロジ—

ズを創業した。

「マルさんは強くなかったが、付き合いはよかった。岸田くんがいちばん強かったんじゃないか」

誤解がないように断っておくと、この時代、プログラムのデバッグするには計算機が空くまで待たなければならなかった。プログラムを計算機にかけても結果が出るまで時間がかかった。

その手持ち無沙汰を麻雀で埋めていた——というのは四分六分で言い訳に近いかもしれない。彼らは徹夜の連続という中に楽しみを見出していたわけだった。

梁山泊の面々が

——自分たちの会社を作ろう。

という話がまとまったとき、実をいうと丸森はコンピュータアプリケーションズに大久保茂を訪ねている。丸森は早稲田大学から沖電気、大久保は米軍立川基地から日本ビジネスコンサルティングを経て独立という経歴なので、二人の接点はそれまでまったくなかった。

大久保は日興証券の電算部にいた伊藤正之が日本タイムシェアを設立したときにも快く相談に応じている。当時の大久保は、ソフト会社の設立を考える者にとって、コンサルタント的存在であったといっている。

「プログラム作成を業とする会社を興したいのだが、ど

うしたものでろう」

と相談すると、大久保は言った。

「とてもじゃないが、儲かる商売じゃない。お金を儲けたいなら、お止めになった方がいい」

だが、それを聞いて丸森は答えた。

「新しい何かを創り出す。面白いじゃないですか」

三

フエアチャイルド・セミコンダクタ（FCS）社に「裏切りの八人」がいたように、SRAにも「創業の七人」が存在した。丸森隆吾、岸田孝一、三田守久、槐道宏、鈴木茂雄、堺進、清水功老の七人である。

FCS社に「もう一人のフエアチルドレン」がいたように、SRAにも「もう一人のSRAマン」がいた。

竹中直文である。

都立商科短期大学教授としてばかりでなく、いち早く情報化時代の到来を予測していた竹中は、情報化による社会や産業の構造変化をとらえようと試みていた。その著書『オフィスワーク・オートメーション』は事務分野に電子計算機が適用されたとき、ホワイトカラーの仕事の仕方が変わることを予言したものだ。

武彦、南澤宣郎、前川良博などとともに、日本能率協会で講師を務め、かたわら「EDPリサーチレポート」を発行したりした。

人物が陰に陽にSRAをバックアップした。

最初の資本金三百万円のうち、丸森が出したのは二百万円で、残りを工面したのは竹中だった。

一九六七年八月、「ソフトウエア・リサーチ・アソシエイツ」という長つたらしい名前の会社が誕生した。東京都中央区湊二丁目、佃大橋のもとにあった「大岩ビル」に本社を構えた。社長には竹中直文の伯父で、荒川区で運送会社を経営していた竹中長次郎が就任した。

社名に「アソシエイツ」を名乗ったのは、公認会計士のようにソフト技術者一人一人が自立し、それぞれが独自のビジネスを展開しつつ相互に協力する新しい運営形態を指向したためだった。

このとき丸森は沖電気の営業係長でもあって、平日は沖電気の仕事をし、休みになると大岩ビルに行つて事務処理をした。沖電気の営業係長という立場を利用して、OUKシリーズを導入したもののプログラマーを確保できず、プログラムを作れないユーザーにSRAを紹介したりした。

そうこうしている間に、社長に担いだ竹中長次郎が病床に就いてしまった。まだソフト会社として自立できていな

いのに加え、社長が重い病いに倒れたとあって、先行きに暗雲が垂れ込めた。

丸森が語るところによると、

「その枕元にみんなが集まって、どうするかを相談しました。仕事はろくにないわけですから、いっそのこと解散するか、という話まで出ました。そのとき、丸森さんが社長になるんなら、続けましょうよ、と経理を見てくれていた会計士さんが言い出したんです。結局、そういうことになってしまった」

どうもこの人物は、頼まれると「イヤ」と言えない性分であるらしい。早大OBで沖電気の海野副社長に事情を打ち明けると、

「しっかりやれ」

と励まされた。

「円満なスピアウト」

であった。

「しかし、三十ちよぼちよぼで、それまで係長だったんだから、いきなり社長の名刺じゃおかしいでしょう。それで一年ぐらい、営業部長の名刺で動いていました」

事実、社長の仕事は仕事を取ってくることであった。他の社員は全員が技術者で、仕事がなければソフト関係の技術書を読んでいた。

四

六二年に早稲田大学を卒業し、丸森と同期で沖ビジネスマシン販売に入った鈴木義矩は、リコーを経て設立四年後の七〇年にSRAに移籍している。一九四〇年生まれ、茨城県出身だが、父親の仕事の関係で高校一年まで新潟県の柏崎で暮した。SRAに移籍すると同時に営業を担当した。このとき鈴木はまったく意識していなかったが、ソフト業で初めての営業マンが誕生した。

「まとまった大きな仕事はなかった」

と鈴木は語る。

「ソフトにお金を払うという認識がなかった時代でしたから、正社員を雇うほど余裕がなかった。仕事があると大学の研究室に頼んだり、学生をアルバイトとして使いました」

同社の第二世代に当たる西田拓二、杉田義明、荒木慎二郎、阿部正道、福隅建次などは、このときアルバイト学生だった人々である。そのなかの一人である杉田義明は、実家が曹洞宗の寺という変わり種である。

高校のとき雑誌で電子計算機のことを知り、どうしても勉強したくて九州で唯一の講座を持っていた九州産業大学

に進んだ。大学の講師として年に数回やってくる竹中直人の授業を受けた。それが縁になった。

のちS R Aが設立した日本ネットワーク・コンピュータイング・デバイセス（N C D）の社長、中国S R A社長を経て、現在はS R A本社に戻りオープンソース推進事業本部副本部長を歴任した。

「研修生ということで、大学に籍をおいたままS R Aで働くようになりました。今でいうインターンシップです。

そういう先進的なことに取り組む会社に魅力を感じました」と杉田はいう。苦し紛れの方策ではあったが、このことがのちに大学・研究室と強い関係を持つきっかけとなった。

鈴木の話が続ける。

「銀行からは融資を断られる、仕事はない。仕方がないので、アメリカの技術書を丸善から買ってきて、その版權を取っては社内で翻訳しました」

設立当初から週休二日制だったが、土曜日は技術勉強会に当てられていた。ソフト関係の技術書を輪読し、勉強するかたわら日本語版を出版したのである。

「わたしが入った七〇年ごろは、まだまだ苦しかったけれども、ぼちぼち仕事が来るようになりました。東京放送の局長をやっていた植田さんという方から話があった、「コンピュータ講座」という番組に当社が協力した。そ

のことで、技術に強い会社」というイメージができ、やとまともな対価をいただけるようになった、と記憶しています」

こうして徐々に経営が軌道に乗り始めた七一年、S R Aは初めて正規ルート——大学の就職課に求人票を提出し、応募者を面接し、入社試験を行う——で新卒採用に踏み切った。世の中一般のプロセスを採用することで、「企業」への転換を図った、といってもいい。

丸森は言う。

「全共闘の空気を含んだ新入社員から、資本家」と呼ばれたことがあるんです。誰のことを言っているのか分からなかった。どうやら自分や岸田のことらしい。二人して、おい、オレたちは資本家なんだぜ、と無邪気に喜んでいました」

会社を経営しているのは事実だが、当人も六〇年安保世代なのである。経済学的な分類でいうところの「資本家」に所属しているという認識がまったくなかった。

やあのちの話だが、七七年に上智大学数学科を卒業して入社した梶浦公一朗は、その正規ルートで採用された一人である。

「友だちから、面白そうな会社だから一緒に受けてみないか、と誘われた。誘ってくれた友人はダメで、誘われた

私が合格した。入社試験といっても、ソフト会社だからという特別なものではなかったし、あとから聞いたら、何となくふてぶてしくて面白そうな男だ、というのが合格にした理由だったそうです」

——採用は人物本位。

という体裁はいいが、粗雑といえば粗雑、破天荒といえば破天荒だった。

~~~~~ 補注 ~~~~~

UNIX マサチューセッツ工科大学が一九六五年から着手した次世代電子技術研究開発プロジェクト「Multics」の研究成果を継承したベル研究所が開発したOSカーネルで、マルチタスク／マルチユーザーの機能を備えていた。

米川村 市町村合併で登米市東和町米川となった。

京極高国 きょうごく・たかくに／1616～1675。元和九年（一六二三）江戸に出て徳川家光に謁し、伊達政宗の娘を妻に迎えた。承応三年（一六五四）父・高広が眼の病を理由に家督を譲り丹後国（兵庫県）宮津に十二万七千石を領した。寛文六年（一六六六）父・高広が高国の不孝と無道を幕府に訴えたことから領地没収となり陸奥国南部家に預けられ扶助料三千俵を受けた。幕府に赦免を申し出たが赦されず、盛岡に没した。

証券会社への入社内定 丸森によると「学生時代から株式投資の『実践研修』を自主的にやっていた」という。「安保闘争のデモ隊を横目にしながら、証券会社の株価掲示板を見に行ったり、儲けた金で岸田クンなんかと酒を飲んだ」とも語っていた。大学院を修了するに当たって、株の売買で取り引きがあった山一証券に出向いたところ、その場で内定が決まった。

虎ノ門 沖電気工業の本社がある。その裏手の森ビルに沖電気工業のコンピュータ・センターがあった。沖電気製コンピュータ「OUKシリーズ」の基本ソフトの開発を行っていた。岸田孝一、三田守久などSRA創業時のメンバーはここに勤務していた。

裏切りの八人 ショックレー研究所を飛び出しフェアチャイルド

社の支援を得てフェアチャイルド・セミコンダクタ社を創業した八人を指す。すなわち、ビクター・グリニッチ、ゴードン・ムーア、ジョン・ハーニー、ジェイ・ラスト、ジュリアス・ブランク、シエルドン・ロバーツ、ユージン・クライナー、ロバート・ノイスである。

東加工 とうかこう・一九一七年（大正六）富山県伏木町（のち高岡市）に設立された「北海電化工業株式会社」が前身。カーバイト、石炭窒素、硫酸などの生産を行っていた。四三年（合金鉄の生産を開始氏、五一年社名を「東化工」に変更した。のち「日本重化学工業」となった。

SRAの社名 会社を設立するに当たって、丸森は岸田と相談し、五つの候補に絞り込んだ。丸森によると、「岸田案のソフトウェア・リサーチ・アソシエイツは社名として長すぎるような気もしたが、自分たちの思いを端的に示していると考えてこれに決めた」と話していた。

# 日本IT書紀 155 肩書きは“営業部長”

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。